



発行所  
カトリック長崎大司教区  
本部事務局  
〒852-8113  
長崎市上野町10-34  
カトリックセンター内  
TEL 095(846)4246  
FAX 095(842)4460

## 日力連30周年・長崎大会と

### 長崎教区連合婦人会結成25周年

長崎教区連合婦人会・指導司祭

山内 実

・日本カトリック女性団体連盟とは  
「日本カトリック女性団体連盟」(以後、日力連)は、世界カトリック女性団体連盟に属する日本の団体である。正式加盟は、1974年。その30周年にあたる今年、長崎での記念大会の運びとなった。15教区・17団体、約3万人の会員にまで広がっている。

日力連は創立当初から顧問司教の指導をいただき、現在は4代目となる大分教区・宮原良治司教が担当している。故・島本大司教も2代目の顧問司教であったことが、「30周年・長崎大会」が実現した一因でもあった。

5年前、25周年・沖縄大会(4月25日)のうちに「いのちを守る運動」を

立ち上げ、日々の祈りと献金を通して、いのちを守る運動への協力を呼びかけている。この5年間は、ドメステック・バイオレンスの授産施設に対する支援を行っている。日力連はその他にも、家庭の見直しや召命促進についても積極的に取り組んでいる。

・日力連30周年・長崎大会

日力連は、15教区・17団体のどこかで、毎年総会を開く。そのおりに、会員の拡大とその地域の会員への日力連の目的や活動に関する意識高揚が計られる。「記念大会」は5年ごとに開かれる。長崎大会には、長崎教区外から約300名、教区内からは約4

00名の参加があった。

30周年大会を長崎で開催するにあたって、最近の世界情勢と長崎の地域性を考慮して、テーマは「平和」と決まった。サブ・テーマを「わたしから始まる地球の平和」とし、身近なところから日常生活でいかに平和な社会を作り出していけるか、を問うこととなった。記念大会の骨格が日力連本部を中心に決定される中、長崎らしさをどう演出していくかが、長崎実行委員会での課題であった。

ひとつは、記念講演会の講師はぜひ女性に、という願いだった。当初、緒方貞子さんが候補に上がったが、日程および政府との調整がつかず、アグネス・チャンさんになった。実にすばらしい講演内容であった。主婦として、歌手として、教育博士のユニセフ大使として世界を駆け巡っておられるバイタリティーがどこから湧いてくるのか、ということがよく理解できた。周りにいる一人ひとりの出会い・関わりを大切にされる姿勢は、しっかりと学びたいものである。特に子どもと女性に対する思いやりは、アグネスの心から出て来るやさしさ・暖かさといえる。

この講演会は、一般の信徒や長崎市民にも呼びかけ、浦上天主堂がほ

ぼ満席となった。

ふたつめは、分散会を長崎地区内の14教会で行ったことである。日力連としては初めての試みである。長崎は信仰の故郷・殉教者の地である。長崎を訪れる日力連の方々に、浦上の大聖堂だけではなく、教区内のどんな小さな教会にも根付き、育まれている信仰のすばらしさに触れていただきたかったからである。と同時に、長崎教区の婦人の皆様が日力連の会員と触れ合うことで、日力連そのものを知り、同じ女性として日々の歩みを共に支え合っていくためでもあった。いい交流会でもあり、平和が私から一身近なところから始まる第一歩となっていく。そんな気持ちになれた分散会だった。14教会の主任神父様や信徒の皆様のご協力に、心から感謝申し上げたい。

・長崎教区連合婦人会も25周年

2004年は奇しくも、長崎教区連合婦人会が結成されて25周年を迎える。記念大会そのものは行わないこととなった。でも、この大会で得ることができた「ひとつのことをみんなで達成していく喜び」「女性の役割の偉大さ」などを基本にして、各地区ごとに25年の歩みを振り返る年にするようになった。



# み言葉の分かち合いとは (2)

## 「み言葉の分かち合い」と

## 「聖書研究」との違い

「み言葉の分かち合い」は、多くの国の教会共同体において、信者の霊性を深める手段として、重要な役割を果たしてきました。

「み言葉の分かち合い」は、聖書の知識に関する研究とは基本的に異なります。

「み言葉の分かち合い」と「聖書研究」ないし聖書の学習との違いは、日常生活の中で一人の人と人格的に出会うことと、その人について話すこととの違いに似ています。したがって、聖書を中心とした集いを始めたいと考える場合は、まず、み言葉の分かち合いと聖書研究との神学的な相違を理解しておく必要があります。聖書の研究もみ言葉の分かち合いもたいへん有益なものですが、一つの会合の中で両方を同時に行おうとすれば、どちらも失敗し

てしまう恐れがあります。

### 1. 聖書研究

・ 聖書研究をするときには、聖書の著者がその当時の人々に何を語ろうとしたのかを探求するための努力をします。

・ 当時の人々の日常生活の様子をできるだけくわしく理解したうえで、彼らが神のみ言葉をどのように理解し、そのみ言葉にどう応えたのかについて調べます。また、当時の人々の言語や文化についても研究します。

・ 聖書研究会で良い成果を出せるためには、聖書の注釈書や聖書の専門家などの力を借りて細かい準備をしなければなりません。徹底した準備がな

ければ、無意味な意見交換の場になる恐れがあります。

・ 聖書に記録されたことについての「研究」や「討論」をするということは、それらを「分析」することでもあります。参加者たちは、聖書が書かれた当時の人々の様子や、事件、聖書に込められたメッセージの意味、などについて学び合います。

・ 聖書を研究（学習）する際には、聖書の本文が教会共同体によってどのように理解されるか、その共同体はそのみ言葉にどのように従い、どのように生きてきたか、という点を重視します。

・ もちろん聖書の注釈者たちは、私たちが聖書をよく理解することを望んでいます。しかし彼らの説明は、聖書に書かれていることが何を意味するか

を理論的に示しはしても、私たちの日常生活を変えるという面には重点がおかれていないのが一般的です。

以上の説明は、学問的な聖書研究の意味を縮小させたり、その価値を下げようと意図してなされているわけではありません。聖書研究には重要な役割があり、絶対に必要なものなのです。その役割とは、たとえば、

① 信仰の教えについての十分な根拠を示すこと

② 教会の全ての信者が守らなければならない倫理的な規範の内容を明確にすること

③ 神のみ言葉を歴史の流れを通して理解すること、など

聖書研究は、過去の深い関わりをもっています。たとえば、2000年前にイスラエルで生きた、キリストの「・・・について」研究します。

聖書研究を通してキリストと個人的に出会うことができないわけではありませんが、み言葉の分かち合いのほうがその面に重点がおかれているといえるでしょう。





## 2. み言葉の分かち合い

み言葉の分かち合いは、いま私たちの現に生きておられる、復活されたキリストとの関わりを大切にします。み言葉の分かち合いを行う大きな目的は、キリストのみ言葉を「理解すること」だけではなく、愛する人と出会うようにキリストと「直接出会うこと」なのです。たとえば、「七段階法」形式のみ言葉の分かち合いに参加する人々は、

ベタニアのマリアがそうしたように、主の足元に座り、主のみ言葉に耳を傾けるために集まることとなります(ルカ10・38〜42参照)。

その集いは、祈祷書に掲載されている祈りを唱えてではなく、数名の人がかわるがわる「神さまをお招きするための祈り」をすることによって始められます(第1段階)。

み言葉の分かち合いでは、聖書のさまざまなみ言葉を通して神さまやキリストと出会います。聖書の言葉は、復活なさった主の現存を実感させる「準秘跡的なしるし」ともなります。グループの中で聖書の一文が読まれるとき(第2段階)、キリストがナザレの会堂で言われた「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(ルカ4・21)ということばどおりのことが、その参加者たちの間でも実現されます。

聖書は、キリストのみ言葉が成就されていく現場に私たちが導く、開かれた門の役割を果たしてくれます。聖書を声を出し

てゆつくりと朗読することで、神さまや今も私たちとともに生きておられるキリストと私たちがその場で出会うことが、それほど難しくはなくなるのです。

み言葉の分かち合いを行うことによって、私たちは、いま自分たちの間においてになるキリストと一緒に、できるだけ長く、意識して留まることができるようになります。分かち合いの中で、私たちは単語や短い文章を繰り返して読みます(第3段階)が、その繰り返しの間にはしばらく沈黙を守ります。この段階がうまく進めば、神の現存を沈黙の中で感じられる、「観想」を体験することもできるでしょう。

次の段階(第4段階)では、沈黙のうちにさらに深く神の現存を実感し、その中に留まることができるよう努めます。

その次(第5段階)には、各自が個人的に特に心に響いた単語や短い文章などに関する分かち合いを、グループのメンバー同士で行います。

以上、「聖書研究」と「み言葉の分かち合い」の違いについて

聖書研究	み言葉の分かち合い
神やキリストがなさったことを研究する	復活した主と直接に出会い、主の現存を実感する
当時の言語、文化、生活などについて研究する	み言葉を聴いたあと、参加者が感じたことや体験などを分かち合う
信仰の根拠についての知識を得る	神からのいやし、なぐさめ、力をいただく
解説書や専門家などから学ぶ	神から直接に教えてもらう

考えてきましたが、これをまとめてみると、次の表のようになります。双方とも、車の両輪のように、信仰を強め、神さまとの交わりを深めるうえで、欠くことのできない、大切なものなのです。



「シリーズ」

## 現代を生きる信仰

みやかわ としゆき  
宮川 俊行

長崎教区司祭

— どう理解すれば？ —

## 新しい「信仰宣言」



## ミサ聖祭と「信仰宣言」

カトリック教会では、主日・祭日のミサ聖祭のとき、参加者全員が立って一緒に「信仰宣言」を行うことになっている。聖書朗読と説教を通してわたしたちの心に語りかけた、三位一体の神への応答の意味をもっている。一部の教会で5世紀に始まったこの習慣は、以後、徐々に広まり、11世紀からは全世界の教会で行われるようになった。

この「信仰宣言」においてどのような文章を唱えるかはさまざまでありうるが、基本的には同一である。「わたしは父である神を信じます」、「わたしは父のおんひとり子イエス・キリストを信じます」、「わたしは聖霊を信じます」

である。三位一体の神を信じる、という宣言である。キリスト教は、基本的には三位一体の神への信仰である。諸信仰宣言文間の違いは、自分の信じる三位一体の各ペルソナ、すなわち、おん父がどのような方であり、おん子がどのような方であり、聖霊が何をなさる方かを言い表している部分にあり、この部分次第で全体が長くなったり、短くなったりする。

## 従来の日本の教会

これまで日本の教会で最も広く用いられてきたのは、「天地の創造主、全能の、神である父を信じます。父のひとり子、おとめマリアから生まれ、苦しみを受けて葬られ、死者のうちから復活し

て、父の右におられる主イエス・キリストを信じます。聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます」という宣言文だった。これは、洗礼式で授洗する司式者が問い、受洗志願者が「信じます」といってそれに答える形で行う、「試問形式」での三回の信仰表明文を信仰の「宣言形式」に仕立て直したもので、第二バチカン公会議後の典礼刷新において、当時の日本司教協議会は、バチカン典礼聖省の認可の下に、わが国ではこの自家製の信仰宣言文もミサ聖祭で用いてよい、ということにした。神のことに応え、洗礼のときの決意を新たにしながら、そのときの信仰表明を繰り返すという主旨だから、一応合理性はあった。

だが、やがて問題が生じてきた。手製のこの信仰宣言文は、全世界の教会が伝統的に用いていた「ニケア・コンスタンチノープ

ル信条」や「使徒信条」と並んで使用することもできる暫定的・補助的なものとして試験的に導入されただけだったのに、徐々に、あたかも教会の代表的公式「信仰宣言文」であるかのように受け止める誤解が広がってしまったのである。

## 新しい「信仰宣言」の方式

この春、日本の司教協議会はこの点の改善を決定した。日本の教会の典礼では、今後、信仰宣言文としては今回発表する新口語訳での「使徒信条」か「ニケア・コンスタンチノープル信条」だけをを用いるという。第二バチカン公会議後の典礼刷新まではこの二つの信条だけだったので、以前の様式に戻ったことになる。

現行のラテン語の規範版ミサ典書では、公式には「ニケア・コンスタンチノープル信条」を用いることになっているが、必要なら

代替信条を使ってもよいとされているので、教会の普遍的な伝統に従って「ニケア・コンスタンチノープル信条」か「使徒信条」を用いる、というのが世界の教会の普通のやり方で、これはカトリック教会の一致のシンボルともなっている。

以下、二つの公式「信仰宣言」について簡単に見ていきたい。

### 「使徒信条」

公会会祈祷書で「使徒信経」と呼ばれていたものである。

「天地の創造主、全能の父である神を信じます。

父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、おとめマリヤから生まれ、ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬られ、陰府（よみ）に下り、三か目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着き、正者（せいしゃ）と死者を裁くために来られます。

聖霊を信じ、聖なる普遍の

教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。

アーメン。」

と唱える。今後、典礼ではひんばんに用いられることになろうから、暗記が勧められる。

カトリック信者であるから信じているさまざまなことの中から、特に大切に、カトリックの信仰の中心と言えるものを簡潔に表現しようとする努力は、教会には初めから見られた。基本的な信仰を手短にまとめた文章は、福音宣教や、信者の信仰教育においても用いられたが、何よりも、洗礼の準備の要理教育の重要な素材だった。もともと洗礼のときの信仰宣言と緊密に関連していた。あちこちの教会でこのような信仰のまとめの文章（信条）が数多く作られたが、中でも特に有名なものが、ローマ生まれとされるこの「使徒信条」である。

起源も古く二世紀末ごろのものでされ、古来、ローマ・カトリック教会では、12使徒の教えを忠実に要約した権威ある信条として重んじられ、格別の存在

感を保ち続けてきた。信者の生活の中でも親しまれ、朝晩の祈りにも出てくるし、ロザリオの祈りもこれから始める。典礼でも、ミサ聖祭中の「信仰宣言」に用いられるだけでなく、成人のキリスト教入信式では、「信条授与」や「信条表明」には原則として「使徒信条」を用いる。先年刊行された『カトリック教会のカテキズム』も、第二バチカン公会議後まで数世紀にわたってカトリック教会の公式教理書として世界的に用いられていたトレント公会議発行の「ローマ公教要理」も、その第一部は「使徒信条」を基にして「わたしたちが信じていることがら」について秩序だてて論述したものである。

### ニケア・コンスタンチノープル信条

これは、教会の伝統で最も重要とされ、また大きな役割を果たしてきた代表的「信仰宣言」文である。特色は、何よりもその権威の特別の大きさである。世界で最初の公会議はニケア公

会議（325）、二番目の公会議は第一コンスタンチノープル公会議（381）であるが、「ニケア・コンスタンチノープル信条」は、これら二つの公会議が作成した、キリスト教の基本的信仰の公式宣言文である。三世紀・四世紀ごろの教会はさまざまの内憂外患に苦しめられながら、啓示の正しい理解の努力を祈りや黙想や研究・論争などを通して続けていき、聖霊の導きの下に、信仰の最も中心的な真理である三位一体の秘義の認識に達し、この信条を生み出した。三位一体の秘義を中心に、カトリックの信仰の基礎的真理がまとめられている。

古来、代表的公式信条として、教会の信仰生活にも圧倒的な影響を保ち続けてきた。ミサ聖祭のときの「信仰宣言」を「正式には」この信条で行うというのも、当然の習慣として世紀から世紀へと永く普遍的に続いてきている教会の伝統である。





# 小教区

## ピックアップ

### 朝の祈り

#### — 本原教会 —



長崎教区のほとんどの教会では、ミサの前に「カトリック祈禱書」を使って朝の祈りを唱えている。だが、本原教会は少し違っている。

この教会では、週日には、ミサが始まる15分前から、司祭、修道者、信徒が一緒になって、「教会の祈り」という分厚い祈禱書を用いて朝の祈りを唱えている。

他の小教区ではなかなかそこまでできないだろうが、何らかの参考になればと思い、同教会を訪ねて、この祈りを始めたころから参加してこられた信徒の一人に伺ってみました。

#### ◆この祈りはいつからいつまで始まったのですか◆

もう30年近くはなると思います。はじめは、一週間分の7つの祈りが載っている「朝の祈り、晩の祈り」という(エンジ色の表紙の)祈禱書を使っていました。そしてしばらくしてから、「毎朝唱えるのだから、4週分の祈りが載っているものを使いませんか」と主任神父様から提案されました。シスターたちも一緒だったからでしょう。そこで、信

徒たちも賛成して、こちらの方を使うようになりました。

#### ◆この「教会の祈り」を使ってみてどうでしたか・・・◆

はじめのころは、その日その日の祈りについていくのが精一杯でした。慣れないこともあって、その祈りの良さには気づくことができませんでした。

神父様の説明によれば、伝統的には「聖務日課」と呼ばれていた聖職者用の祈禱書だったものが、公会議の後に日本語訳が出されるときに、特定の人だけでなく神の民みんなの祈りだということを強調するために、「教会の祈り」と呼ばれるようになったのだそうです。

しばらくやっているうちに、こうして私たち信徒が一緒に祈ることは、教会共同体として自然な形だと思えるようになりました。そして、ミサの前にこの祈りに参加することは、ミサにあずかる良い準備にもなっていると感じています。

#### ◆先唱も担当なさっているのですか◆

今では、信徒が何人か交代で先唱部分を担当しています。当番に当たった一週間は非常に緊張していて、毎朝祈りが終わるとホッとします。

特に大変なのは、聖人の祝日や季節(待降節・復活節など)の祈りです。何箇所かページを変えながら祈るので、前もって

家でよく準備をしてきます。最近やっと1年間の流れがつかめるようになりました。そして、何とかこの役が果たせるようになっていくことを喜んでいきます。

#### ◆信徒の参加状況はどうですか

また、これから希望することは・・・  
ミサの15分前からなので、最初から参加できない人がおられたり、年々皆が年を取ったりすることもあり、参加者が減ってきていました。

しかし、今年、教会に備え付けの「教会の祈り」を揃えてから、新たな信徒の参加者が増えました。その中のある方は、これからの祈りを続けたいとおっしゃって、個人用のものを買って積極的に参加されています。

何も私たちがだけが特別な祈りをしていない意識はないのですが、気になることといえば、祈りの途中から入ってこられた方がこの祈りには参加しないので不自然な感じがするということへらいます。途中からでもかまわないのでみんなの祈りに加わっていただければありがたい、と考えています。

また、本原教会と同じように週日だけでもよいので、この「教会の祈り」を利用する信徒(小教区)が増えて、この祈りのすばらしさを感じただけ多くの方に味わっていただき、この祈りを通して教会全体の祈りに参加しているという意識が教区全体に広がっています。・・・とも願っています。



# 出会い



親友のNさんとの出会いは、マリア・ワルトルタの著書「神と人なるキリストの詩」との出会いともなった。

彼女から借りた最初の一冊を読みはじめた私を、何かが捕らえていく。信じていたはずのものを、胸元に突き付けられ改めて問い直されると、みじめさばかりが見えてくる。

読み進むにつれてしだいにたかくなな心がときほぐされ、思いの根底をゆさぶられて、自分の中に降りてくるものがあつた。私の人生を変えてくれた本との「出会い」である。

イスラエルの美しくもかわしい自然と、キリストの言葉……。マリアの愛や使徒たちの思い……。そのひとつひとつをゆっくりと味わいながら、半年をかけて十巻を読み終えた。改めて、人との出会い、本との出会いに感謝している。

三度の食事とまではいかないが、

本は好きである。文字が書いてあれば何でもよいというたぐいの読書だから、ジャンルを選ばない。知識を得るといふよりも、読んでいこう行為自体が、安心とストレス解消につながっているらしい。ただ、老眼鏡が必要になってからは読むスピードは極端に落ちた。

本との最初の出会いは、自分ではまだ文字を読めないころだった。学校の図書室で借りてきた本を、夜、裸電球の下で兄が読んでくれる。当時テレビがなかったわが家の、数少ない楽しみの一つであった。小学生の兄だから決してうまく読めなかつたはずなのに、まるでアニメを見るように、言葉の後ろにある風景が透けて見えた。主人公と一緒に想像の世界に遊ぶ、わくわくする楽しい時間だった。

一年生に上がりほどなくして、病気のために一カ月ほど学校を休んだ

私に、担任の先生から本が届けられた。早く元気になれるようにとのメッセージが添えられて。

緑色の表紙に、聖母子と幼い子どもたちが描かれている。天使祝詞が題材になったその絵本は、色刷りのイラストがとてもかわいく、一瞬で私の心をつかんでしまった。生まれてはじめて手にした「私の本」だった。嬉しかった。

何十回、何百回ページをめくったことだろう。目をつぶっても読めるほどに覚えてしまった言葉たちが、今でも時おり口をついて出てくる。

小さなマリアは ひが出ると  
よくかたづけて そうじした  
おへやの中で たたえませ  
じぶんをつくった 天主さま  
たいへんやさしい おこころに  
天主さまから おくりもの  
きれいな天使が あらわれて  
マリアにやさしく ごあいさつ

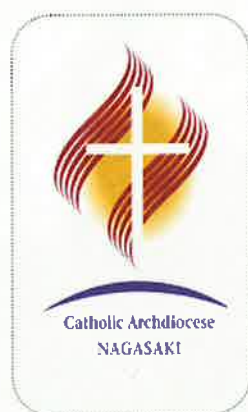
「めでたしせいちょう  
みちみてるマリア」  
せいほは天主に こころから  
おれいをいわれ つつしんで  
そのおくりもの うけられる

傷んで色あせたその本は、五十年近い歳月を経て私のもとにある。

今、子どもへの本の読み聞かせが薦められている。現代の豊富な映像の中で育つ子どもたちは、意外にも本を読む声に耳を傾けるのだという。両親の肉声で読まれる本は、子どもにとつては、どんなにすばらしいテープよりも千倍も面白いものとなる。親のふところの中で子どもはやすらぎ、触れ合いの時間の中で親自身も癒されていくのだと思う。

図書館で絵本や童話のコーナーをのぞけば、子どもに読んであげたいと思う本に必ず出会うはずだ。その本を何十回も繰り返し繰り返し読み聴かせることで、親子の絆も子どももの感性も深まるに違いない。やがて成長し、行間にある作者の思いを読み取れるようになると、本はもっと楽しくなり、生涯手離せない本との「出会い」も可能になるだろう。

(荒木 登志子)



# 生活教会

の中の

## 開拓者たち

仲知小教区には、かつて小植賀、野首、瀬戸脇、米山、仲知、赤波江、江袋、大水の教会堂があった。細長く伸びた中通島の津々浦々には、今も山を背に、教会堂が斜面に這うように建っている。

仲知（島ノ首）の移住開拓が始まったのは、一八一〇年ごろ。西彼岸・黒崎村の島本与治右衛門らが最初の開拓夫婦として移住したことによる。その後、真浦、久志、大水、赤波江と、開拓が続いて行く。

真浦の浜に教会堂が建ったのは、一八八一年。平屋建て三九坪の、木造瓦葺であった。

その後、二代目の教会堂が、一九四八年八月、山口司教によって祝別され、約三〇年にわたって、「み堂」となった。

一九七八年五月、三代目となる仲知教会堂新築工事に着手した。各戸の負担額は百数十万に及び、支払いの労苦は筆舌に尽くせないものであった。しかし、永田師と信徒たちは幾多の苦難を乗り越え、その年の暮れには、里脇大司教による祝別、落成の日を迎えることができた。

わずか七十数戸で築き上げられた教会堂は今、ステンドグラスに彩られている。その地を訪れる者は、信仰者の偉業への驚きと感動の念で満たされる。



仲知教会

フォトプラン 山本 富夫